

2(B). 葵氏艶譜【きしえんぷ】(外)

〈刊〉大本三巻三冊
文化十二年(1815)六月刊
雙鳩子【そうきゅうし】(斎藤秋圃【さいとう・しゅうぼ】)[画]
大坂 富田屋七兵衛【とみたや・しちべえ】板
大坂 藤屋徳兵衛【ふじや・とくべえ】板
大坂 河内屋嘉七【かわちや・かしち】板
彩色版
補刻
宝玲文庫、鬼洞文庫旧蔵



『葵氏艶譜』は初版1(A).本刊行後、三年後に改題本『歳時事実 廓中艶譜』(文化三年(1806))が、更にその九年後には外題を初版に戻した『葵氏艶譜』2(B).本が刊行されている。2(B).本は、初版本の画をそのまま使用し、和文序と発句の部分新たに刊行したもの。

特に注目すべきは序で、初版と同じ「ちぬ翁」こと奇瀧によるもの。「葵氏は花洛人 初(め)足齋 又雙鳩と号す。後築石(つくし・筑紫)に下りて何某の君の寵を得て奉仕す。秋圃とあらたむ(後略)」と、作者「葵氏」こと「雙鳩」が、大坂から筑紫へ下り仕官して「秋圃」と名のったことが記される。筑紫に至るまでの経歴を裏付けるものとして注目されよう。

また、発句部分も刷新され、下巻はそのまま一丁分だが、上巻は一丁増えて合計三丁、中巻も一丁増の計二丁と初版本よりも増丁される。秋圃の発句も初版では中巻(五丁裏)「かへられし下駄のひくさよおほろ月 足齋」と記されるが、2(B).本では同じ句ながら上巻(「上又七」丁裏)に「葵氏秋圃」と作者名が変更して記され、和文序の経歴と呼応する。

諸家発句には初版と同様廓関係者も見えるが、加えて上巻(七丁裏)に芝翫(三代目中村歌右衛門)、中巻(「又四」丁裏)に璃寛(二代目嵐吉三郎)、という化政期上方人気役者の双璧が見えるのは、時代を反映したためか。同時に中巻(四丁裏)には「いよ(伊予)良雅」「をの道(尾道)蔵六」等、発句者が上方以外の広範に渡っているのも初版にはみえなかった特長である。